

反対語辞典

専修大学教授・文学博士 中田武司 監修
錦城高等学校教諭 卷幡文男

反对語辞典

監修

専修大学教授・文学博士

中田武司

錦城高等学校教諭

卷幡文男



日東書院

監修者

中田武司 (なかだ・たけし)

岐阜県高山市に生まれ、国学院大学
大学院文学研究科修了。現在、専修
大学文学部教授(大学院教授)、中古
文学会常任委員、文学博士。著書に
「王朝歌物語の研究」などがある。

巻幡文男 (まきはた・ふみお)

広島県因島市に生まれ、国学院大学
文学部卒業。出版社勤務を経て現在、
東京都小平市・錦城高等学校教諭と
して国語科を担当する。

S14/4 (日 6-2/53)

二 義辞典

100230

昭和51年 5月10日 初版発行
昭和54年 3月20日 10版発行

反対語辞典

監修	中田武司
編者	巻幡文男
発行者	山際正文
印刷所	古明地孝雄
	大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 日東書院

東京都新宿区簗笥町13

郵便番号 162

電話 東京 260-5560

振替口座・東京5-37871番

※落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

0581-10514-5750

反対語辞典

監修

専修大学教授・文学博士

中田武司

錦城高等学校教諭

卷幡文男

日東書院

契齋集

新編

士族學文・新編大辭書

田中角次郎

新編文學叢書

民文叢書

日東書局

は し が き

現代は情報過多の時代である。新造語や外来語が氾濫し、古来より受け継がれた国語の美しさが、ともすれば見失われがちである。言葉においても、種々なものが混在している。私たちは、豊かな言語文化に恵まれてきただけに、特に正しい言葉と間違った言葉を、自ら判別できる知恵を養っていかなければならない。

その大きな役割の一つを、担っているのが辞書である。私たちは、よく不正確な知識を正しいと信じ込み、後でその誤りを知って驚くことがある。こんなとき辞書を引けば、一瞬のうちに誤りを訂正でき、そのうえ新しい知識を得た格別の喜びも味わえるはずである。

少し口上が長すぎたが、「反対語」について考えてみよう。一般に「反対語」は、日常あまり重要でない分野のように思われがちである。しかし、小学校から高校、大学に至る言語教育の面で、また文学の面で、非常に重要な意味をもっている。それゆえ、「反対語」研究の必要性も、最近はとみに高まってきているのである。

だが、「反対語辞典」は他の辞書と同様に、座右の書として利用されるべきであるのに、現在のところ出版されているのは、中村一男先生編「反対語大辞典」のほか数冊にしか過ぎない。これは本当に残念である。

本辞書の編集にあたり、「反対語」を拾い集めていく過程で感じたことは、言葉の広がりや、物に対する思考の広がりなどの面白味である。一つの言葉に対する的確な「反対語」を捜すのは、簡単なようで非常にむずかしい。長い歴史の中で、種々の意味をもつ言葉として造られてきた「語彙」の不思議な組み合わせに、編者たちは知らず知らず魅了されていったのである。

最後に、本辞書の特色を述べさせていただく。まず、本辞書は、語彙を他の辞書のように単なる五十音順にせず、同発音で同漢字を使った「熟語」を掲げるという方式を採用したことである。それゆえに、本辞書は「熟語辞典」としても利用していただけるはずである。つぎに、

平易な記述により、中学生から大学、一般人に至るまで、幅広く手軽に利用できるようにした点である。

また、一般に「反対語」といっても、厳密には「対照語」が多いのである。本辞書も「反対語辞典」ではあるが、対照語も反対語の一部とみなして数多く集録した。前述したように、一つの言葉に対する的確な「反対語」を見つけ出すことの困難さ、また「反対語」と「対照語」の区別の困難さを考慮するにつけ、本辞書も完璧というにはまだまだ研究の余地が残されている。今後の改訂で、一層充実したものにしていきたい。

なお、本辞書の編集にあたっては、諸先生方の御指示や御協力を仰いだほか、多数の辞典・書籍を参考にさせていただいた。主要なものを掲げ、心より感謝の意を表する次第である。

昭和51年4月3日

編 者

主要参考文献

中村一男編「反対語大辞典」(東京堂出版)、中村一男編「英語反対語辞典」(東京堂出版)、佐伯梅友編「反対語辞典」(集英社)、新村出編「広辞苑」(岩波書店)、西尾実編「岩波国語辞典」(岩波書店)、金田一京助監修「明解国語辞典」(三省堂)、佐々木達編「新コンサイス英和辞典」(三省堂)、三省堂編修所編「広辞林」(三省堂)、「世界百科大事典」(平凡社)、臼田基五郎監修「ことわざ辞典」(日東書院)、その他

本辞書の使い方

1. 本辞書は、反対語か対照語を左右対照に配置した。反対語の選択は、編者の責任で行なった。
2. 見出し語は、まず発音を表記し、漢字に音訓ある場合は()内に音読みをカタカナで、訓読みをひらがなで入れた。発音が訓読みと一致する場合は省いた。
あく 悪 (アク わるい)
悪意 [あくい] 善意 [ぜんい]
3. 見出し語で、同発音・同漢字を含む語が並ぶ場合は、共通の漢字を頭に出し、その反対語を右に記し、以下五十音順に配置した。ただし、共通した頭文字に対する反対語がない場合は右を空白にした。
4. 見出し語の読み方は、[]を付して表記した。
5. 反対語と対照語を区別し、対照語のみ図の形で表わした。この区別は、他書を参考のうえ、編者の責任において付した。
6. 類語のあるものは、図の形で表わし、類語を列記した。
7. 当用漢字以外の漢字については上に*印を付した。
図——対照語 *——当用漢字以外
図——類語
8. 中間的意味をもった語も、対照語として集録した。
今週——先週・来週
9. 表記は、現代かなづかい、当用漢字を基本とした。しかし、従来より慣例とされた表記はそのままにした。
10. 外来語はカタカナで示し、ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォは、バ・ビ・ブ・ベ・ボに統一して原語を示した。
11. 反対語の用例は、「 」または「——〇〇」の形で記載した。
12. 読みがなや説明文が同じ表記や記述の場合は、——で表わして省略した。
13. 前出の反対語が別項で再び出た場合は、原則として説明文を省略した。
14. 見出し語の説明文は簡潔に記述したが、その行で終わらないときは、上の余白に折り曲げて続かせた。
15. 反対概念を表わす古事・ことわざは、[]を付して読み方を別に表記せず、特別難解な文字にのみルビを付した。

[illegible]

あ

あ 亜 (ア) 次のもの。主たるものに対して用いる。

亜聖〔あせい〕聖人につぐ人。

亜炭〔あたん〕炭化度の低い下等品の石炭。

亜熱(寒)帯〔あねっ(かん)たい〕地球上の気候のうち、温帯の中で、熱(寒)帯に近い気候帯の部分。

亜流〔ありゅう〕一流のものをまねただけのもの。

あ〔吾〕^あわれ。わたし。

アーティフィシャル〈artificial〉人工的、人為的な。

あい 愛 (アイ) かわいがる。このむ。

愛護〔あいご〕かわいがり、まもる。「動物——」

愛好〔あいこう〕心から好く。

愛情〔あいじょう〕愛する心。

愛想〔あいそ〕人あしらいがよい。「——がいい人」

愛他主義〔あいたしゅぎ〕他人をだいじにする主義。

あい 哀 (アイ あわれ あわれむ) かなしむ。かわいそう。

哀情〔あいじょう〕わびしい思い。「歓楽極りて——多し」

哀悼〔あいとう〕いたみ悲しむこと。「——の辞」

あい 相 (ショウ ソウ) 共に。たがいに。適合

相対売買〔あいたいばいばい〕

売手と買手の1対1の売買。

相手〔あいて〕「——方」

(本来のもの。主たるもの。正統なもの) 対

聖人〔せいじん〕^対徳の高い人。

石炭〔せきたん〕^対地下で太古の植物が炭化したもの。

熱(寒)帯〔ねっ(かん)たい〕^対地球上の気候のうち、赤道(極地)の付近で、温帯に属さない部分。

一流〔いちりゅう〕^対その世界で第一等のもの。独得なもの。

な〔汝〕^対なれ。あなた。

ナチュラル〈natural〉自然な。天然のもののような。

憎〔ぞう〕にくむ。嫌〔けん〕きらう。いやがる。

虐待〔ぎゃくたい〕むごいあつかいをする。「——防止」

嫌悪〔けんお〕心からきらう。

憎悪〔ぞうお〕にくみいとう。

不愛想〔ぶあいそ〕とっつきが悪い。「——な人」

利己主義〔りこしゅぎ〕自分を、まずだいじにする主義。

楽〔らく〕たのしむ。歓〔かん〕よろこぶ。「歓喜」

歓楽〔かんらく〕よろこびたのしむこと。「——街」

祝賀〔しゅくが〕慶賀〔けいが〕祝いよろこぶ。歡喜〔かんき〕

独り〔ひとり〕片〔かた〕^対一方のみ。同例でないもの。

せり売買〔せりばいばい〕^対多数の人で値をつける売買。

手前〔てまえ〕「——方」

相部屋〔あいべや〕宿などで、
へやを同じくする。〔類〕合宿
相惚れ〔あいぼれ〕互いに愛し
あい、思いあうこと。

相役〔あいやく〕役職の同じ人
のこと。〔類〕同僚・同役

相四つ〔あいよつ〕すもうで相
手と得意のさし手が同じ。

アイディア〈idea〉理想 構想

あいにく〔生憎〕間が悪く。

あいまい〔曖昧〕形や意味などが
はっきりしない。

あう 合う（ゴウ）会う（カイ）
逢う（ホウ）あう。

あう 遭う（ソウ）たまたま事
に出あうこと。「難に——」

アウト〈out〉外側 球技では相
手方の得点となる場合をいう。

アウト・オブ・デート〈out of date〉
時代おくれ 旧式のやり方。

アウトプット〈out put〉電算機
などで結果を取り出す。

あお 青（セイ）

青ずむ〔あおずむ〕青くなる。

青田〔あおた〕とり入れ前の、
成熟期の稻田のこと。

青菜に塩〔あおなにしお〕失望
の連続などでしおれること。

青二才〔あおにさい〕未熟な者。

青葉〔あおば〕新緑のころに出
る新しい若葉のこと。

あおく 仰ぐ（ギョウ）首を上げて
見る。尊敬の意。「空を——」

あおむく 顔を上に向けること。

あか 赤（セキ）

赤字〔あかじ〕支出が収入より
多く、欠損の出ること。

赤松〔あかまつ〕めまつ。

あかがね 銅の和名。

一人部屋〔ひとりべや〕〔対〕一人
一人の独立したへや。

片思い〔かたおもい〕片方だけ
が愛し、したうこと。

上役〔うわやく〕下役〔したや
く〕〔対〕役職の上(下)の人。

喧嘩四つ〔けんかよつ〕すもう
で相手と得意のさし手が違う。

リアリティ〈reality〉現実 実際

おりよく〔折よく〕ちょうどよく。

めいかい〔明解〕めいかく〔明
確〕はっきりして明らか。

はなれる〔離れる〕わかれる〔別
れる〕ゆきちがう〔行違う〕

のがれる〔逃れる〕「からくも
難を——」

イン〈in〉内側 球技では相手
方の失点となる場合をいう。

アップ・ツー・デート〈up to
date〉現代向き 当世風。

インプット〈in put〉電算機な
どで情報源を操作に入れる。

赤らむ〔あからむ〕〔対〕赤くなる。

黒田〔くろた〕〔対〕植えつけ前の、
土のままの田のこと。

蛙の面に水〔かえるのつらにみ
ず〕厚顔で平気でいること。

老いぼれ〔おいぼれ〕〔対〕年寄り。

赤葉〔あかば〕枯葉〔かれは〕
〔対〕落葉するころの葉のこと。

ふす〔伏す〕首を下にたれる。
服従の意。「頭を——」

うつむく 顔を下に向けること。

黒〔くろ〕白〔しろ〕〔対〕

黒字〔くろじ〕収入が支出より
多く、利益の出ること。

黒松〔くろまつ〕〔対〕おまつ。

くろがね 〔対〕鉄の和名。

- あかす 明かす (メイ) かくして
いたことを打ち明ける。「身
分を——」徹夜する。
- あかつき 曉 (ギョウ) 明け方。
- あからさまに かくさずはっきり。
- あからむ 赤らむ (セキ) 赤くな
って来ること。
- あからむ 明らむ (メイ) 夜明け
で空が明るくなってくる。
- あがり 上がり (ジョウ) 上昇す
ること。物事が完了すること。
- あがる 上がる (ジョウ)
- あかるい 明るい (メイ)
- あかるむ 明るむ 明るくなる。
- あき 秋 (シュウ)
- 秋蚕 [あきご] 秋に飼うかいこ。
- 秋雨 [あきさめ] 秋に降る雨。
- 秋高 [あきだか] 米が凶作で秋
に米相場が上がること。
- 秋の七草 [あきのななくさ] ハ
ギ、オバナ (ススキ)、クズ、
ナデシコ、オミナエシ、フジ
バカマ、キキョウ (またはア
サガオ) の七種の秋に咲く花。
- 秋の日はつるべ落し 秋の日は
短く、日はすぐ沈んでしまう。
- 秋晴れ [あきばれ] 秋のからり
と晴れた青空の好天気。
- あきらか 明らか (メイ) はっき
りしていて確かなこと。
- あきらめる 諦める 物事にだめ
だと見切りをつけること。
- あきる 飽きる (ホウ) 満足して
いやになること。みちたりの
こと。
- あく 開く (カイ) 「戸が——」
- あく 明く (メイ) 空く からに
なる。「席が——」
- あく 飽く (ホウ) あきる。たりる。
- ひめる [秘める] かくしておく。
「名を——」くらす [暮らす]
朝から夜まですごす。
- たそがれ 夕暮れどき。
- あん [暗に] それとなく。
- あおずむ [青ずむ] 青くなっ
て来ること。
- くらがる [暗がる] くらくなっ
て来る。
- さがり [下がり] 下降すること。
物事が不要になること。
- さがる [下がる]
- くらい [暗い]
- くれなる くらくなる。
- 春 [はる] 春
- 春蚕 [はるご] 春に飼う——。
- 春雨 [はるさめ] 春に降る雨。
- 秋落ち [あきおち] 米が豊作で
秋に米相場が下がること。
- 春の七草 [はるのななくさ] セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハ
コベラ、ホトケノザ、スズナ、
スズシロの七種の春の代表的
な植物をいう。
- 春の晩飯後三里 春の日は長く
晩飯のあとでも三里は行ける。
- 春霞み [はるがすみ] 春のか
すんだうららかな好天気。
- ふたしか [不確か] あやふやで
はっきりしていないこと。
- ねばる [粘る] あくまでも、あ
きらめないで続けること。
- こる [凝る] 深く熱中すること。
- うえる [飢える] みちたりの
こと。
- しまる [閉まる・締まる]
- ふさがる 「席が——」「部屋が
——」
- こる [凝る] うえる [飢える]

あく 握 (アク にぎる) 「掌握」
 あく 悪 (アク わるい) よくない。

悪意 [あくい] 人をあしかれと
 思うところ。よからぬ意図。

悪因 [あくいん] 「——悪果」
 前世の悪事がたたること。

悪運 [あくうん] 悪い、よくな
 い運命のめぐりあわせ。

悪縁 [あくえん] 悪い縁。

悪業 [あくぎょう・あくごう]
 前世に行なった悪事のこと。

悪妻 [あくさい] よくない妻。

悪材料 [あくざいりょう] 相場
 などで下落の原因となるもの。

悪食 [あくじき] いわゆるいか
 もの食いのこと。

悪事千里を行く とかく悪いこ
 とは、世間にはすぐ知れてし
 まう。

悪質 [あくしつ] たちのよくな
 いもの、またこと。

悪酒 [あくしゅ] 悪いさけ。

悪習 [あくしゅう] 悪い習慣。

悪臭 [あくしゅう] 悪いにおい。

悪書 [あくしょ] 悪い書物。

悪女 [あくじょ] 根性の悪いた
 ちのよくない女。

悪心 [あくしん] 欲深い悪い心。

悪声 [あくせい] きたない声。

悪政 [あくせい] 悪い政治。

悪性 [あくせい] 性質の悪いこ
 と、またもの。

悪戦 [あくせん] 苦しいつらい
 戦い。「——苦闘」

悪相 [あくそう] 悪い人相。

悪態 [あくたい] みっともない
 さま。相手をあしざまにいう
 こと。「——をつく」

ほう [放] はなす。「放出」

善 [ぜん] 良 [りょう] 好 [こ
 う] 美 [び] 吉 [きち]

善意 [ぜんい] 好意 [こうい]
 人がよかれと思うところ。

善因 [ぜんいん] 「——善果」
 前世の善行が報いられること。

好运 [こううん] 吉運 [きちう
 ん] よい運命のめぐりあわせ。

良縁 [りょうえん] よい縁。

善業 [ぜんぎょう・ぜんごう]
 前世に行なった善行のこと。

良妻 [りょうさい] すぐれた妻。

好材料 [こうざいりょう] 相場
 などで上昇の原因となるもの。

美食 [びしょく] 美味のものを
 好んで食べること。

好事門を出てず とかく善いこ
 とは、世間にはなかなか知ら
 れない。

良質 [りょうしつ] 質のよいも
 の、またこと。

美酒 [びしゅ] うまいさけ。

良習 [りょうしゅう] よい習慣。

芳香 [ほうこう] よい香り。

良書 [りょうしょ] よい書物。

貞女 [ていじょ] 身持ちがよく
 貞節な女。

良心 [りょうしん] 善を願う心。

美声 [びせい] きれいな声。

善政 [ぜんせい] よい政治。

良性 [りょうせい] 性質のよい
 こと、またもの。

善戦 [ぜんせん] 力いっぱい
 のりっぱな戦い。

吉相 [きっそう] よい人相。

媚態 [びたい] なまめかしいさ
 ま。相手にこびへつらうこと。
 人に取り入ろうとする態度。

悪玉〔あくだま〕悪い役まわりの人(舞台などで).

悪徳〔あくとく〕道徳に反する.

悪鷹〔あくば〕ののしること.

悪日〔あくび〕悪い運勢の日.

悪筆〔あくひつ〕字のへたなことで、へたな字.

悪評〔あくひょう〕悪い評判.

悪風〔あくふう〕悪い風俗, 習慣. 「旧来の——」

悪文〔あくぶん〕まずい文章.

悪弊〔あくへい〕よくないしきたり.

悪魔〔あくま〕キリスト教で人を悪にさそうサタン.

悪名〔あくみょう〕評判の悪い名, またその人物.

悪友〔あくゆう〕悪い友.

悪用〔あくよう〕悪く使う.

悪例〔あくれい〕よくない例.

悪化〔あつか〕悪くなること.

悪貨〔あつか〕質の悪い貨幣.

悪漢〔あっかん〕悪いやつ.

アクション〈action〉作用. 行動.
あくせく せせこましく, まわりにかまわずふるまうこと.

あくる 明くる(メイ)「——日」

あけ 明け(メイ ミョウ)

明け方〔あけがた〕夜明け.

明けの鐘〔あけのかね〕夜明けにならず鐘.

明けの明星〔あけのみょうじょう〕夜明けに見える金星.

明け放す〔あけはなす〕残らず窓などをあけてしまう.

あげ 上げ(ジョウ)

上げ潮〔あげしお〕満ちしお.

上げ舵〔あげかじ〕航空機で上昇に向かう舵をいう.

善玉〔ぜんだま〕いい役まわりの人(舞台などで). 善人.

美德〔びとく〕道徳にかなう.

賞賛〔しょうさん〕ほめること.

吉日〔きちじつ〕よい運勢の日.

達筆〔たっぴつ〕字のじょうずなこと. じょうずな字.

好評〔こうひょう〕よい評判.

美風〔びふう〕淳風〔じゅんぷう〕よい風俗, 習慣.

名文〔めいぶん〕うまい文章.

良習〔りょうしゅう〕よいしきたり.

神〔かみ〕天使〔てんし〕キリスト教で全智全能者と精霊.

美名〔びめい〕人々に高い賞賛を得た名, またその人物.

*畏友〔いゆう〕尊敬すべき友.

善用〔ぜんよう〕よい事に使う.

好例〔こうれい〕ふさわしい例.

好転〔こうてん〕よくなること.

良貨〔りょうか〕質のよい貨幣.

好漢〔こうかん〕好ましいやつ.

リアクション〈reaction〉反作用.

のんびり 悠々として, あせらず, ゆっくりふるまうこと.

すぐる〔過ぐる〕「——年」

暮れ〔くれ〕入相〔いりあい〕

暮れ方〔くれがた〕夕方. 宵.

入り相の鐘〔いりあいのかね〕夕方にならず鐘.

*宵の明星〔よいのみょうじょう〕暮れ方に見える金星.

締め切る〔しめきる〕窓などをすべて外界から閉じてしまう.

下げ〔さげ〕

下げ潮〔さげしお〕引きしお.

下げ舵〔さげかじ〕航空機で下降に向かう舵をいう.

あげ 揚げ (ヨウ)

揚げ超〔あげちょう〕政府収入が、政府支出を上まわる場合。
 揚げ荷〔あげに〕陸に揚げる荷。
 揚げ幕〔あげまく〕花道の出入口にたらししてある幕。

揚げ屋〔あげや〕芸妓を置き屋から呼んで遊ぶ家。

あげく〔挙げ句〕連歌で最後の七七の句。転じて最後にの意。
 「——の果て」

あける 明ける (メイ ミョウ)
 「夜が——」

あける 開ける「窓を——」

あける 空ける「席を——」

あける 上げる「荷物を——」

あける 揚げる「旗を——」

あける 挙げる「手を——」

あさ 朝 (チョウ)

朝起きは三文の得 朝早く起きる者は日々利益を得る。

朝影〔あさかげ〕朝日の光。

朝駆け〔あさがけ〕明け方襲う。

朝風〔あさかぜ〕朝吹く風。

朝方〔あさがた〕朝のうち。

朝霧〔あさぎり〕

朝餉〔あさげ〕朝食のこと。

朝ぼらけ〔あさぼらけ〕朝のまだ明けないあいだのこと。

朝焼け〔あさやけ〕

あざ 字 村の下の部落名。

字名〔あざな〕本名のほかにつける呼び名。中国より伝わる。

あさい 浅い (セン)

浅黒い〔あさぐろい〕少しうす黒い。「——人」

浅瀬〔あさせ〕水の流れの浅くなっているところ。

浅手〔あさで〕傷の軽いこと。

散超〔さんちょう〕政府支出が政府収入を上まわる場合。

積荷〔つみに〕船に積み込む荷。
 引き幕〔ひきまく〕廻舞台正面にたらしして左右に引く幕。

置き屋〔おきや〕廻芸妓をかかえて住ませている家。

ほくく〔発句〕廻連歌で最初の五七五の句。転じて一般に俳句のことをいう。

くれる〔暮れる〕日が沈んで暗くなる。「日が——」

しめる・とじる

ふさぐ「席を——」

さげる〔下げる〕「荷物を——」

おろす〔下ろす〕「旗を——」

おとす〔落とす〕

夜〔よる〕夕〔ゆう〕廻

朝寝好きの夜田打 朝寝好きは人の休む時に働かねばならぬ。

夕影〔ゆうかげ〕夕日の光。

夜討ち〔ようち〕夜襲をする。

夕風〔ゆうかぜ〕夜風廻

夕方〔ゆうがた〕夕ぐれのうち。

夜霧〔よぎり〕夕霧〔ゆうぎり〕

夕餉〔ゆうげ〕夕食のこと。

夕まぐれ〔ゆうまぐれ〕夕ぐれのうす暗いあいだのこと。

夕焼け〔ゆうやけ〕

町〔まち〕村〔むら〕廻

実名〔じつめい〕廻自らの名。本名のこと。

深い〔ふかい〕

青白い〔あおじろい〕少し青ずんで白い。「顔色が——」

深間〔ふかま〕水の流れの深いところ。「——にはまる」

深手〔ふかで〕傷の重いこと。

浅はか〔あさはか〕おろかな。
 あし 脚(キヤク) 足(ソク)
 足掛り〔あしがかり〕足場
 足かせ〔あしかせ〕足につける
 刑具 足手まとい。
 足が地につかぬ 不安で落ちつかぬさま。
 足拍子〔あしびょうし〕足で地を打ってつける拍子。
 足まめ〔あしまめ〕すぐにどこへでも出かけること。
 足もと〔あしもと〕足のまわり。
 足もとにも寄れぬ 相手と比べてみて格段の差があること。
 足弱〔あしよわ〕歩く力が弱い足。
 足を洗う 足を抜く よくない事から身を引いてしまうこと。
 あずまおとこ〔東男〕関東の男。
 あそぶ 遊ぶ(ユウ)
 遊び人〔あそびにん〕
 あだ 仇 かたき。自分に害を与えるもの。うらみのもと。
 仇を思て報いる うらんでいるものに逆に恩愛を与える。
 あたえる 与える(ヨ)
 あたたか 温か(オン) 暖か(ダン)
 温かい 暖かい〔あたたかい〕
 「——冬」
 温まる 暖まる〔あたたまる〕
 温める 暖める〔あたためる〕
 あたま 頭(トウ)
 アダム〈Adam〉キリスト教などで人類最初の男性。
 あたらしい 新しい(シン)
 あたる 当たる(トウ)
 当たって砕ける イチかバチかやってみること。
 当たりくじ〔あたりくじ〕

賢い〔かしこい〕りこうな。
 腕〔うで〕手〔て〕**対**
 手掛り〔てがかり〕**対**糸口。
 手かせ〔てかせ〕**対**人などの手につける刑具。
 手ぐすねひく 準備が十分で待機しているさま。
 手拍子〔てびょうし〕**対**手を打ってつける拍子。
 手まめ〔てまめ〕**対**休まず手仕事をする事。
 手もと〔てもと〕**対**手のまわり。
 肩を並べる 相手と比べてみて互角であること。
 健脚〔けんきゃく〕よく歩き、よく走る強い足。
 手が入れば足も入る 少し手をつけた事にずるずる入りこむ。
 きょうおんな〔京女〕**対**
 働く〔はたらく〕
 堅気〔かたぎ〕まじめに働く人。
 恩〔おん〕自分に利益を与えてくれるもの。感謝の対象。
 恩を仇て返す 報いるべき恩義に害を与える。
 うばう〔奪う〕
 冷やか〔ひややか〕
 冷たい〔つめたい〕寒い〔さむい〕「——冬」
 冷える〔ひえる〕さめる。
 冷やす〔ひやす〕さます。
 てあし〔手足〕**対**
 イブ〈Eve〉**対**キリスト教などで人類最初の女性。
 ふるい〔古い〕
 外れる〔はずれる〕
 手をこまねく あえて行動しないで、じっと見送ること。
 空くじ〔からくじ〕

あつ 圧 (アツ) ある広がりをも
って押しつける。「圧力」

圧縮 [あっしゅく] おしちちめ
て体積を小さくすること。

圧勝 [あっしょう] 大差で勝つ。

圧倒 [あっとう] 大きな力の差
で相手をしのぐこと。

圧迫 [あっぱく] おしつける。

圧伏(服) [あっぷく] むりじい
して従わせること。

あつい 暑い(ショ) 熱い(ネツ)

あつい 厚い(コウ)

厚かましい 図々しい。

厚衣(着) [あつぎ] 多く着る。

厚地 [あつじ] 厚い生地。

厚手 [あつで] 織物・紙・陶器
などで、生地の厚いこと。

あっさり 淡白な。しつこくない。

あっせん [幹旋] 仲をとりもつ。

アップ・ツー・デート <up to date>
現代向き。

あつまる 集まる (シュウ)

集める [あつめる]

あつものに懲りてなますを吹く

一度失敗すると、その恐れの
ないものまでに用心しすぎて
臆病になる。

あつらえ 注文仕立て。

あつれき [軋轢] 仲が悪く争う。

あてる 充てる 当てる (トウ)

当て事とふんどしは向うからは
ずれる 自分の力で引き締めな
いと、勝手な期待は相手の方
からだめになる。

あと 後 うしろ。

後足で砂をかける あとに残る
ものに、迷惑をかけても知ら
ん顔で立ち去る。

後々 [あとあと] 将来 以後。

引 [イン] 図手前の方に引きよ
せる。「引力」

膨張 [ぼうちょう] ふくらませ
て体積を大きくすること。

惨敗 [ざんぱい] 大差で敗れる

伯仲 [はくちゅう] 互いの力に
差のないこと。

反発 [はんぱつ] はねかえす。

信(心)服 [しんぷく] 信頼して
心から従わせること。

さむい [寒い] つめたい [冷たい]

薄い [うすい]

いじらしい けなげでかわいい。

薄衣(着) [うすぎ]

薄地 [うすじ] 薄い生地。

薄手 [うすで] 織物・紙・陶器
などで、生地の薄いこと。

こってり 濃厚な。しつこい。

りかん [離間] 人の仲をさく。

アウト・オブ・デート <out of
date> 時代おくれ。

散る [ちる] 散らばる [ちらばる]

散らす [ちらす]

のどもとすぎれば熱さを忘る

一度失敗しても、その時がす
ぎてしまうと、もうそのつら
さを忘れてしまう。

できあい 既製のもの。

わごう [和合] 仲よく親しむ。

外す [はずす]

苦しい時の神頼み 日ごろ信心
のないものが、苦しくなると
すぐ、神様などを勝手に期待
して当てにする。

前 [まえ] 先 [さき]

立つ鳥跡を濁さず 鳥がとび立
つ時のように、あとをきれい
に迷惑をかけず立ち去る。

前々 [まえまえ] 以前 過去。